

長岡市内遺跡発掘調査報告書

石 動 地 区

南 原 遺 跡

栖 吉 地 区

1992

長岡市教育委員会

序

長岡市内には火炬土器出土の馬高遺跡や「ふるさと歴史の広場」事業が進んでいる藤橋遺跡など200か所を超える遺跡があります。その多くは規模や内容等、遺跡の概要が不明確です。このため、長岡市教育委員会では昭和62年度から国・県から補助金の交付を受けて、遺跡の概要等の確認調査を行ってきました。これまでに14遺跡で調査を実施し、遺跡の保護や各種開発との協議資料の整備に努めてきました。

平成3年度は、未周知の遺跡が所在する可能性が高い宅地造成計画地や土地改良事業計画地で遺跡の所在確認を、また市営住宅の改築計画に伴って南原遺跡の遺跡残存状況等の確認を目的に調査を実施しました。本書はこれらの遺跡確認調査の記録です。調査の成果は、調査結果に基づいて開発主体者等と協議を進めるなど、積極的に活用を図っております。

今年度の調査を行うに当たり、文化庁・新潟県教育委員会をはじめ、関係各位から多大な御指導・御協力をいただきました。ここに心からお礼を申し上げます。

平成4年3月

長岡市教育委員会

教育長 大西厚生

例　　言

1. 本書は平成3年度の国・県の補助金の交付を受けて実施した「長岡市内遺跡発掘調査」の記録である。
2. 調査は長岡市教育委員会が主導となつて平成3年5月から10月までの間に行つた。
3. 本書は駄形が試筆・作成した。

目　　次

1. 石動地区確認調査	1
2. 南原遺跡	5
3. 栖吉地区確認調査	14
4. おわりに	18
調査体制	18
調査に御指導・御協力を いただいた方々	18

1. 石動地区確認調査（第1図～第5図）

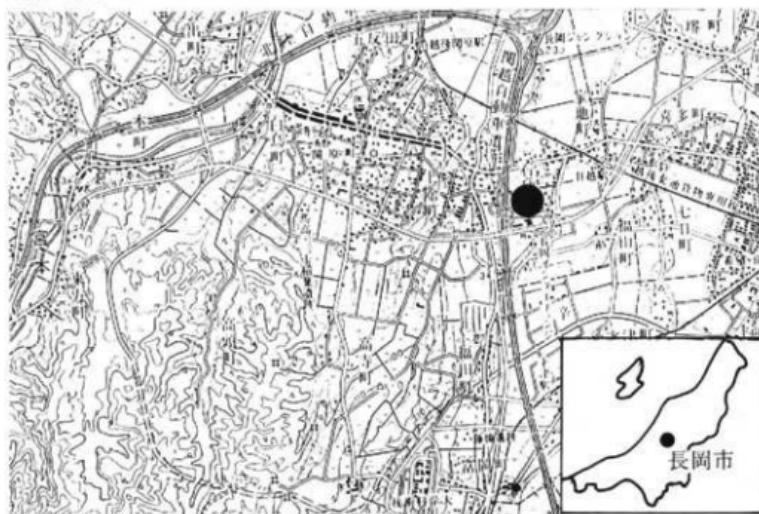
所在地 長岡市石動町・上除町

立地（第1・3図） 関越自動車道の長岡インターチェンジの北側で、信濃川左岸の沖積地に位置している。標高は約25m。調査対象地は、古老からの聞き込みによれば、1931・32年ごろに闇場整備が行われたという。

調査に至るまで 平成3年1月に石動・上除地区に宅地造成計画に伴う開発事前協議書の合議があった。これを受けた分布調査を行ったが、土器等の遺物は発見されず、協議書には「遺跡は確認されていないこと、及び工事中に発見した場合は速やかに届け出ること」の旨を回答した。その後、平成3年3月27日付けで、新潟県教育委員会から「開発地内には未周知の遺跡が存在する可能性があるので、文化財保護に遺漏のないよう配意すること、を開発業者に回答したので連絡する」旨の事務連絡文書が入った。このことについて、新潟県教育委員会と協議を行った結果、遺跡確認調査を実施するようにとの指導があった。この指導に基づき、開発業者と協議を重ね、5月に確認調査を行うことになった。

調査（5月8日～13日） 宅地造成計画地を対象にして、水田2～3枚に1ヵ所（3×4m）を原則として調査グリッドを設けてバックフォーで発掘する。

調査の結果（第4図） 合計30グリッドを発掘した（発掘面積は360m²）。18Gで竖穴住

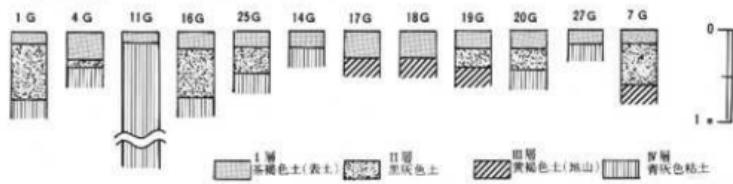


第1図 調査地位置図 (1/50,000 長岡)

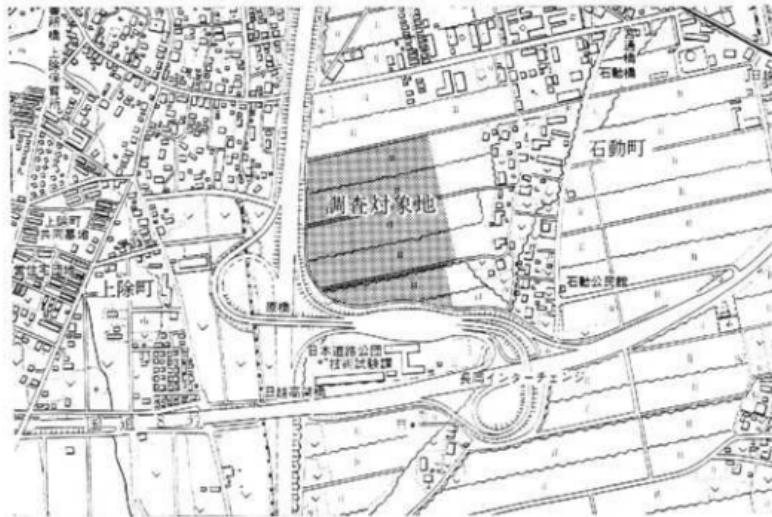
居らしい落ち込みが検出され、拡張して発掘したところ遺構でないことを確認する。遺物は須恵器・土師器の小破片が3点出土した程度である。

土層序（第2図） 調査対象地の基本土層はI層（耕作土）、II層（黒灰色土）、III層（地山）であるが、IV層の地山がなく、V層の青灰色粘土が基盤土層となっている箇所が見られた。特に4Gは青灰色粘土が3m以上にも及んでおり、かつての水路部分と思われる。これまでの調査経験から遺物包含層と思われる土層は観察されなかった。

まとめ 本調査は開発予定地に遺跡が所在するかを目的に行った。この調査資料に基づいて新潟県教育委員会と協議を行い、①遺構がないこと、②出土遺物は小破片であること、③土層の観察から遺物包含層はないものと思われること、④開発予定地は1930年代に圃場整備事業が行われて遺跡があったとしてもすでに消滅したことなどから、開発予定地に遺跡は存在しないと、結論づけた。



第2図 石動地区の土層柱状図



第3図 調査地周辺の地形図 (1/10,000)



第4図 石動地区確認調査グリット図



調査地近景（南から）



調査地近景（東から）



調査地近景（西から）



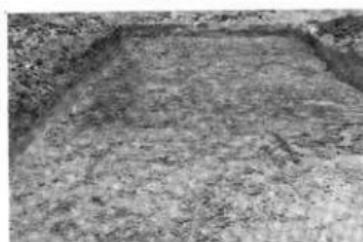
調査地近景（北から）



発掘スナップ



発掘スナップ



18 + 30G 完掘状況



25G 完掘状況

第5図 石動地区確認調査

2. 南原（みなみはら）遺跡（第6図～第14図）

所在地 長岡市上除町甲3558番地ほか

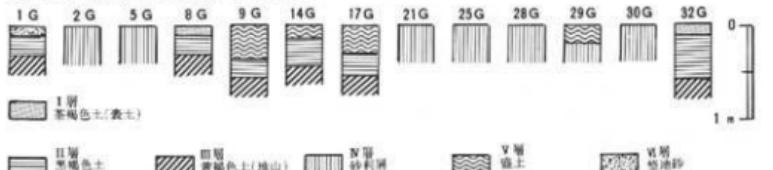
立地（第8図） 通称関原丘陵の信濃川左岸の河岸段丘に位置する。標高は約45mで、沖積地との比高は約20mを測る。現況は1958年に建設された市営上除住宅である。関原丘陵上には縄文時代中期の馬高遺跡（3）、転堂遺跡（2）、後期の三十稻場遺跡（4）、晚期の藤橋遺跡（5）など多数の縄文遺跡が所在している。

調査に至るまで 本遺跡は1958年の住宅建築で、遺跡は消滅したと思われていたが、入居者の子弟が土器を採集し、遺跡は残存していることが確認された。その後、市営上除住宅の改築が計画され、主管課と遺跡の取り扱いについて協議を行い、遺跡残存部分を確認し、改築工事の前に発掘調査を行って記録を保存することにした。

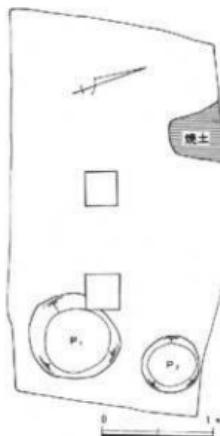
調査（6月24日～7月5日） 遺物採集地点を中心に 2×3 mの調査グリットを基本に32か所設け、そのうちの30グリットを人力で発掘した（発掘面積200m²）。グリットは第9図の範囲外にも設定している。なお、調査地南側は公園敷地と埋没沢であり調査しなかった。

調査の結果（第9図） 1Gでピット2基と焼土1か所が確認され、縄文時代中期の土器等が数か所のグリットから出土した。遺物は遺物包含層（II層）のほか、造成時の削平土からも出土した。

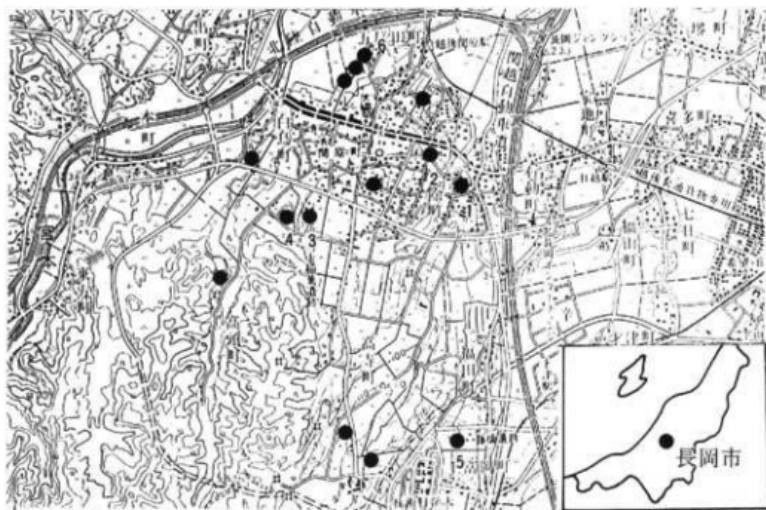
土層序（第7図） 南原遺跡の基本土層序は表土（I層） 黒褐色土（II層）、地山（III層）の3層である。遺物を包含しているのはII層で、1・7・11・13・14・16・17Gにみられた。が、10・13・16・17Gの4グリットは傾斜地にあってII層は薄く、II層の上に削平土が厚く堆積していた。14Gにも削平土がみられた。また、27・29Gは削平土が地山の上にあり、削平土中に土器が数点出土した。その他、2・5・21・30Gなどでは表土ではなく、IV層の砂利層であった。



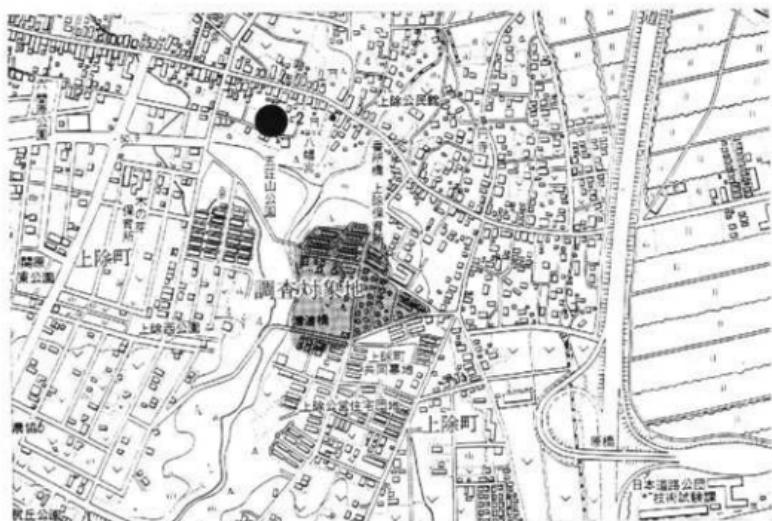
第7図 南原遺跡の土層柱状図



第6図 1Gの遺構



南原遺跡周辺の縄文遺跡（1/50,000 長岡）



南原遺跡周辺の地形図（1/10,000）

第8図 遺跡位置図



第9図 南原遺跡確認調査グリッド図 (1/1,500)

遺構（第6図） 1Gの北側で幅30~50cm、確認長45cmの焼土と、グリット東側で直径約80cmと約50cmで深さ約30cmのピットが2基確認された。周辺から縄文時代中期の土器などが出土している。焼土は地床がの可能性が高く、1Gを中心に竪穴住居跡の存在が予測される。遺構の確認は1Gだけで、他では確認されなかった。

遺物（第10図～第14図） 縄文時代中期の土器が1,756点（総重量約25kg）と、土製耳飾1点、打製石斧2点、磨製石斧1点が出土している。

中期前葉の土器（第10図～第13図）には蓮華文（1～3）、爪形文（4～13）および爪形文の胸部文様の格子目文（14・15）と縄文を地文上に平行沈線文を描くもの（16～33）がある。21～33は半截竹管による半隆起線である。前葉の土器は在地の新保・新崎式の土器である。その中でも蓮華文の土器は古い段階である。

中期中葉は在地の火焔型土器様式と東北地方の大木様式の土器などがある。34は口縁が外に開く器形で、縄文地文上に粘土紐を円弧状に貼付している。35は半截竹管の半隆起線で円弧文を描いている底部に近い破片。36は外反する器形で、円弧文が描かれている。37は36の文様の一部と思われる。38～40は浅鉢で、39・40は縦の沈線が上部にみられる。39はさらに隆帯で下部と区画し、胴部に縄文を地文に沈線文を加えている。34～40は大木8a式の古い段階のものと思われる。

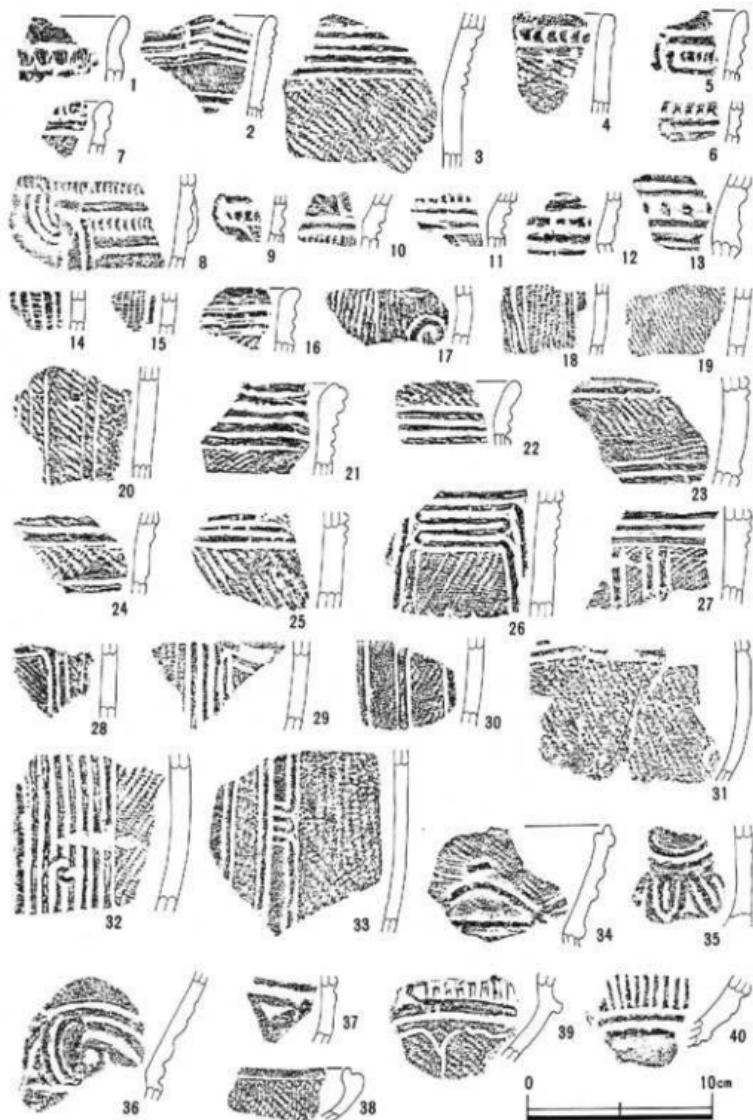
41～43は火焔型土器の破片で、41・42は鶴頭冠状把手の破片、43は胴部の破片である。44～55は大木8b式もしくは並行する土器。44は大木8b式の小形深鉢土器である。45～51は口縁が大きく内湾する大木8b式のキャリー・バー形土器で、45～50は口縁部の破片である。45・47～49は縄文の地文に半隆起線で渦巻文を描いている。46・50は半隆起線文の中を縦方向の沈線を充填している。51は緩く屈曲する胴部に矢羽状沈線と半隆起線の渦巻文が描かれている。52は沈線で円弧文を描く大木8b式に並行する土器と思われる。53～55は口唇部に渦巻文があり、頭部が無文の大木8b式並行の土器である。

56は53～55の口唇部の渦巻文が口縁に描かれた土器で、中期後葉の大木9式に並行するものと思われる。57は縦の降線に円形の刻目を加え、そこを中心にして縦と横に沈線文で文様を構成している。後葉の大木10式に並行するものと思われる。

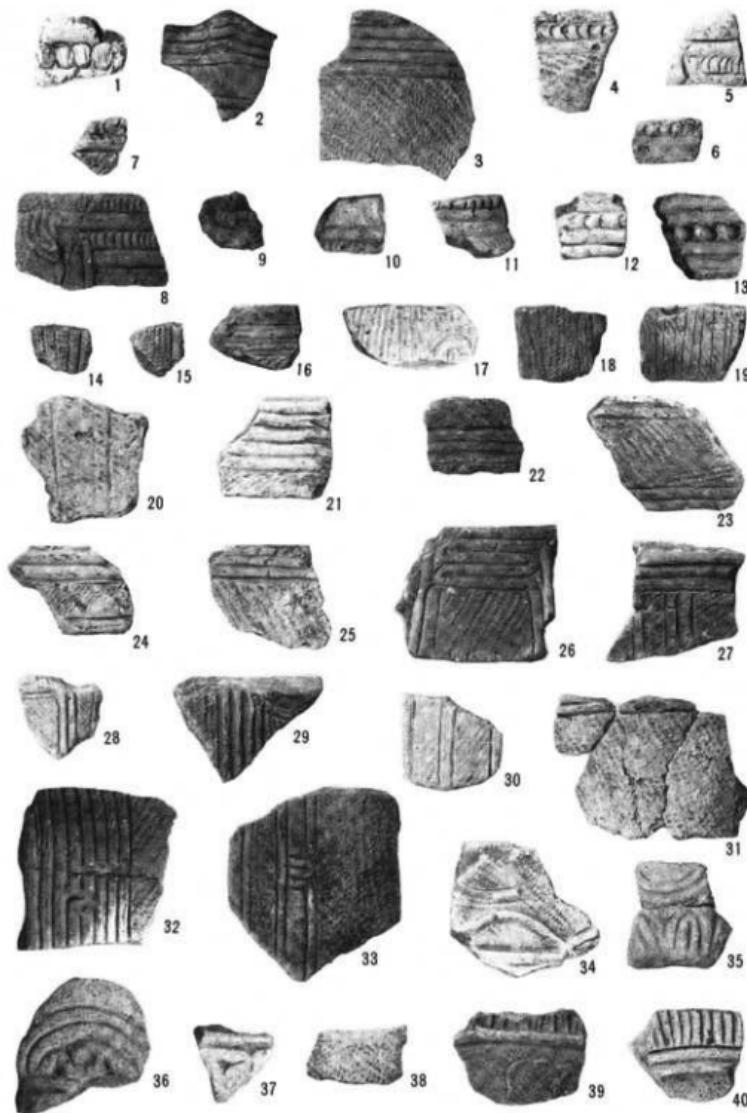
58～73は縄文もしくは撚糸文の土器破片で、いわゆる粗製土器である。74・75は底部破片で、74はアンギン編みの痕跡が、75には網代痕跡がみられる。

第14図1は滑車形の土製耳飾、2は打製石斧、3・4は磨製石斧である。

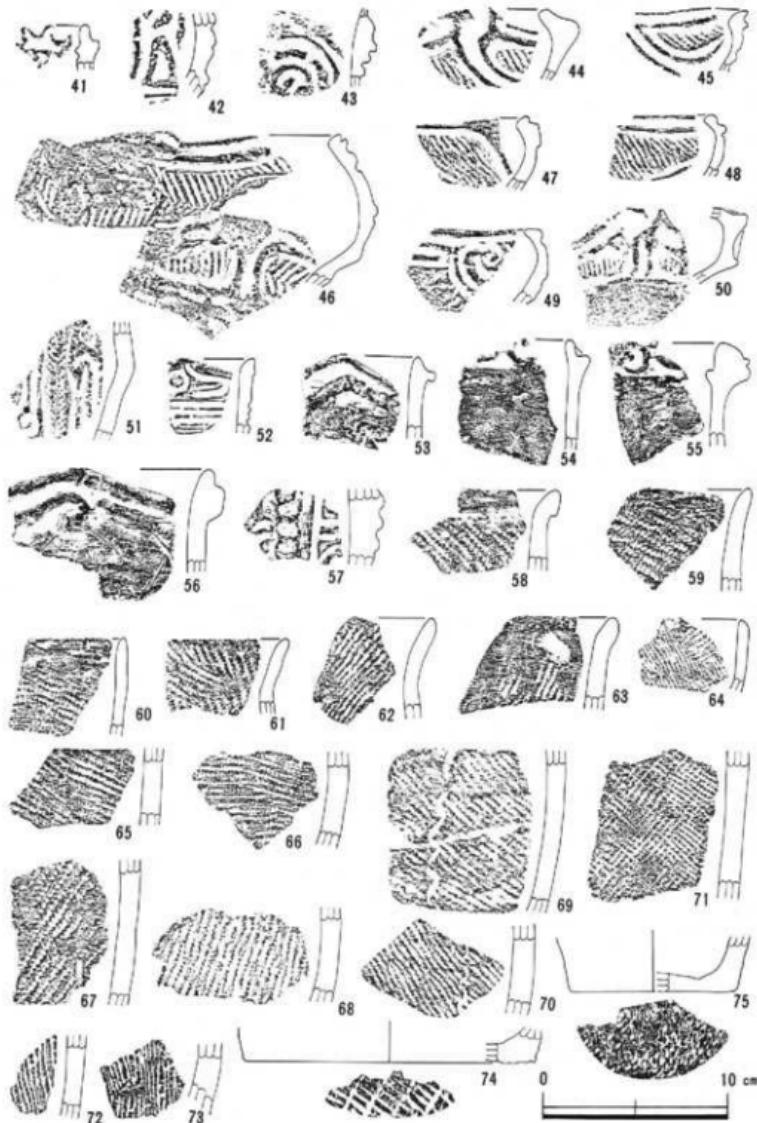
まとめ 南原遺跡は1958年の市営住宅建設工事すでに消滅しているものと思われていたが、今次調査で縄文時代中期の遺構・遺物が検出された範囲（面積約3,500m²）に遺跡が残存していることが確認された（第9図）。今後はこの調査成果に基づき、市営住宅の改築以前に発掘調査を実施して記録を保存する予定である。



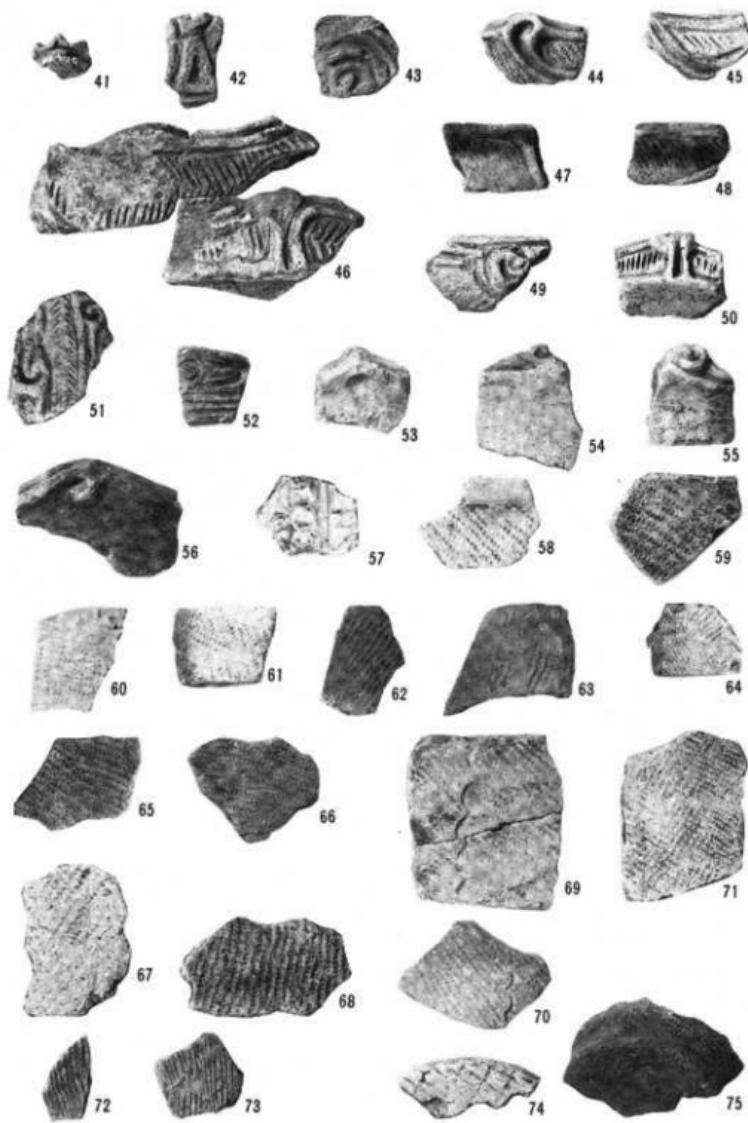
第10図 南原遺跡の縄文土器(1)



第11図 南原遺跡の縄文土器(2)



第12図 南原遺跡の縄文土器(3)



第13図 南原遺跡の縄文土器(4)



遺跡近景（東から）



遺跡近景（南から）



発掘スナップ



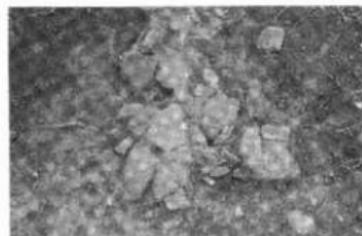
埋め戻しスナップ



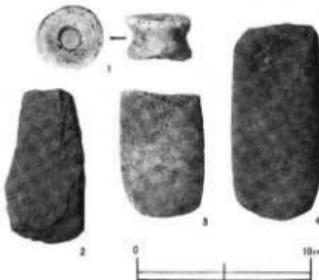
11Gのピット



11G耳飾出土状況



11G縄文土器出土状況



第14図 南原遺跡確認調査

3 栖吉地区確認調査

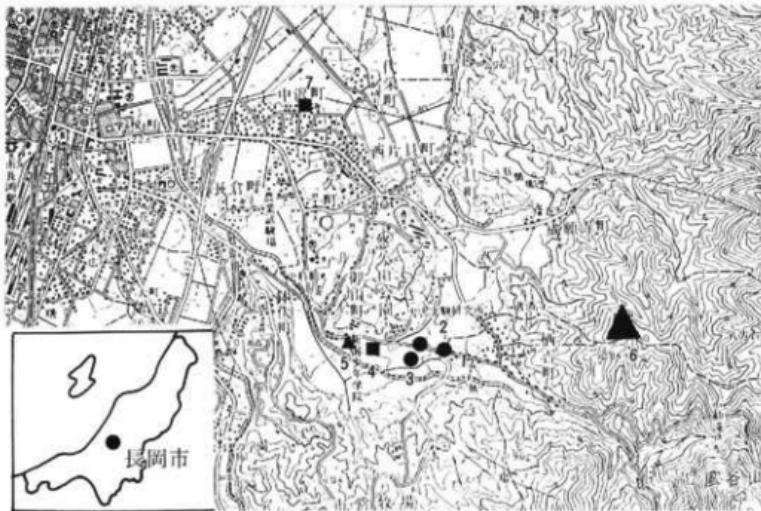
所在地 長岡市栖吉町字北原・字中道ほか

立地（第15・18図） 東山丘陵からの栖吉川左岸に開けた扇状地に位置する。標高は約72~83m。現況は水田。栖吉地区には大明神（1）、栖吉（2）、中道（3）の縄文時代の遺跡と、栖吉城跡（6）、三貫梨館跡（4）、三貫梨墳墓（5）の中世遺跡があり、近くには中沢館跡（7）がある。

調査に至るまで 栖吉地区に中山間地域農村活性化総合整備事業が計画され、その事業地が大明神・栖吉遺跡に隣接するため、事業が2遺跡に及ぼす影響と、事業計画地に未周知の遺跡が所在するかの確認調査を行うことになった。

調査（9月25日~10月18日） 調査の方法は中山間地域農村活性化総合整備事業の地元協議会（栖吉地区圃場整備協議会）からバックフォーの提供を受け、4×5mを原則としたグリットを33か所発掘する。発掘面積は約500m²である。なお、調査対象地西側は耕作機械が埋まるほどの深田で、埋没沢と思われるため、調査グリットは設けなかった。

調査の結果（第19図） 大明神・栖吉の2遺跡に隣接するグリットには、遺構・遺物が分布せず、事業予定地に2遺跡は伸びていないものと思われる。遺跡未周知地に設けたグリットの2・11・30Gの3か所から中世の土器が各1点出土した。遺構は発見されなかった。



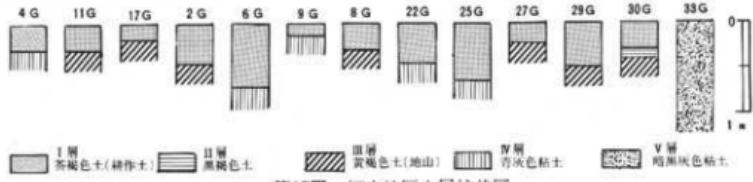
第15図 調査地位置図（1/50,000 長岡）

土層序（第17図） 水田が調査地のため、基盤層が黄褐色土（Ⅲ層）のほかに青灰色粘土（Ⅳ層）の部分もある。調査地は33Gより東の集落内を谷頭とする扇状地にあたり、基盤層にⅣ層が多く見られた。また、從前から農家が個別に改田を行っており、土層序に擾乱がみられた。遺物包含層と思われるⅡ層黒褐色土が残っていたのは、青磁が1点出土した30Gだけであった。他のほとんどに改田の痕跡が認められた。33Gの土層序は暗黒灰色粘土層だけで、扇状地の谷頭部分の様相を呈していた。

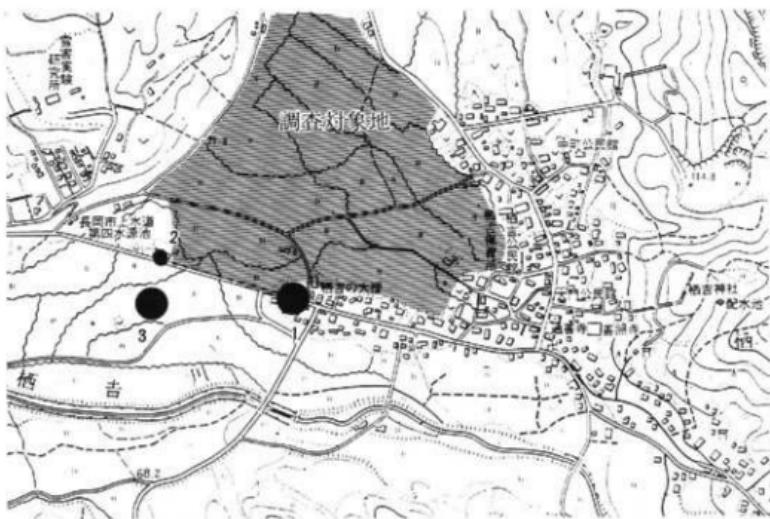
遺物（第16・20図） 珠洲焼が1点（第16図）、青磁が2点（第20図2・3）出土した。珠洲焼は平行叩目が外面にある甕もしくは壺の底部に近い破片である。青磁は楕の口縁部（3）と体部（2）の破片がある。湿地が調査地であるので、柱材や木柵などの発見が期待されたが、出土しなかった。



第16図 出土珠洲焼



第17図 栖吉地区土層柱状図

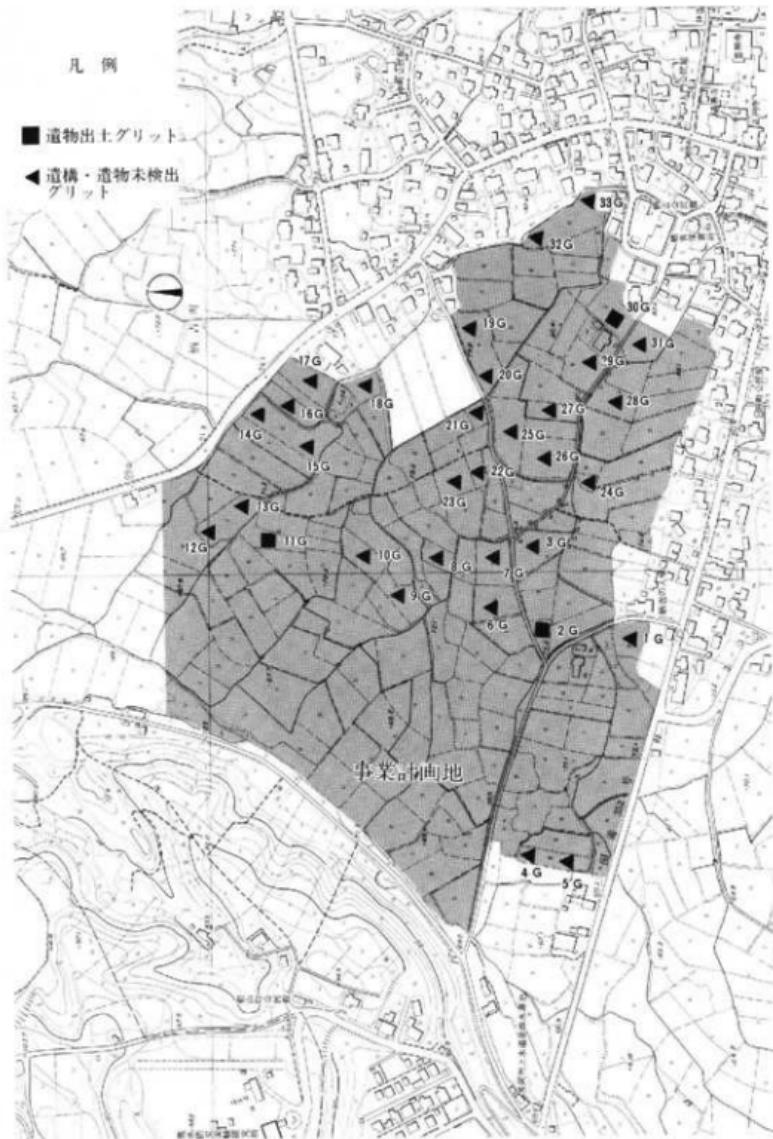


第18図 調査地周辺の地形図 (1/10,000)

凡例

■ 遺物出土グリット

◀ 道構・遺物未検出
グリット



第19図 梶吉地区確認調査グリット図 (1/5,000)



調査地（西から）



調査地（東から）



発掘スナップ



発掘スナップ



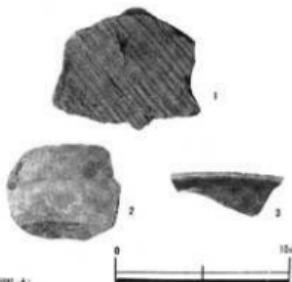
30G 青磁出土状況



出土状況



30G 完掘状況



第20図 栖吉地区確認調査

まとめ 本調査は、事業計画地に周知の遺跡(大明神・栖吉遺跡)がかかるか、また、事業計画地に未周知の遺跡が存在するかの確認を目的に実施したものである。その結果、周知の遺跡は計画地には含まれていないことと、事業計画地の3グリットから中世の珠洲焼と青磁が出土したことを確認した。この調査結果について新潟県教育委員会と協議を行い、事業計画地に未周知の遺跡の存在が予測されるので、平成4年度に遺物出土グリット周辺で試掘調査を行い、出土地点が確実に遺跡であるかを確認するように、との指導があった。

4 おわりに

昨年度までは主に、周知の遺跡と開発計画との関係を目的に調査を行ってきたが、今年度は開発予定地で未周知の遺跡が存在するか否かの調査を行った。これは工事中に未周知の遺跡が発見される事例が近年多くなってきたので、遺跡の存在が予測される開発計画地にも調査の対象を広げて、できるだけ工事中における遺跡の不時発見を避けることを目的にしたものである。そのような状況を受けて、今年度は未周知の遺跡の存在が予測される石動地区および栖吉地区の開発計画地を対象に確認調査を行った。来年度も引き続き開発計画地に未周知の遺跡が存在するかの調査を行い、できるだけ工事中における遺跡の不時発見を避けるようしたい。

調査体制

調査主体者 長岡市教育委員会（教育長 大西厚生）
調査担当者 駒形敏朗（長岡市教育委員会社会教育課）
調査事務局 長岡市教育委員会社会教育課
調査作業員 地元有志

調査に御指導・御協力をいただいた方々（五十音順）

株式会社三和土地興業開発 木村 煉 小林英一郎 坂井秀弥 佐々木謙昌 栖吉町圃場整備協議会 長谷川大五郎 水沢美徳 宮下貞雄

長岡市内遺跡発掘調査報告書

石動地区・南原遺跡・栖吉地区

平成4年3月30日印刷 平成4年3月31日発行

発行：長岡市教育委員会
